



賢いはたらき方のススメ🕒

丸山 茂樹さん



日本人プロゴルファーとして海外で活躍する先駆者となった丸山茂樹さん。アメリカに渡った当時は、プロスポーツにおける日米の違いに驚くばかりだったという。ゴルフ界に留まらず、社会的規範、価値観が日本とどう違ったのか。グローバル化が求められる日本のビジネスパーソンにとって、参考になることがある。

成功者からヒントを学び、国境を越えた視野を持つこと

― 丸山さんは日本で活躍後、PGAツアー（米男子ゴルフツアー）で3勝されるなど、プロゴルファーとして海外でもご活躍でした。現在も日本とアメリカを行き来する生活でいらっしゃいますが、日米でゴルフ界のどのような部分に違いをお感じですか？ゴルフに限らず全てのスポーツに言えることですが、何から何まで違います。年俸や賞金の金額が海外では5倍、10倍ということもありますし、アメリカのプロスポーツ界は年金制度が充実していて、現役を引退しても手厚い保障が受けられるんです。

それに、プレジデントカップのギャランティは自分が選んだ団体や機関に寄付することが義務づけられているのですが、どこに寄付したらよいか周りの選手に相談したら「自分のジュニア育成基金はつくっていないのか？」と逆に聞かれてしまいました。お恥ずかしい話ですが、プロ6年目にしてジュニアの育成のために基金を設立するなど考えたこともなかったんです。日本では、先輩たちもまだそういう活動はしていませんでした。海外では寄付が節税対策になるという側面があるものの、この活動は日本も見習うべきだと思いましたね。

― 海外進出をされたのは、賞金額などスケールの違いをご存知だったからですか？

PGAツアーに挑戦したのは、子どもの頃からの夢だったからです。もともと「アメリカは違うぞ」という意識はありましたが、具体的にこれだけ違うというのはアメリカでプレーするようになって初めて知りました。「すごい！」と驚いたのと同時に、日本ではどうして同じことができないんだろう？ と考えました。

第一に、アメリカはプロスポーツのマーケットが巨大です。資金が日本とは桁違いだから、できることもスケールが大きい。優秀な成績を収めたら手厚い待遇があるとなれば選手もプレーに気合いが入ります。その結果、試合を見る人も盛り上がりスポーツ中継の視聴率が伸びる。そういうプラスの循環ができています。

― 日本で同じようにするのは難しいということでしょうか？

変えられる余地はあると思います。アメリカのゴルフ界も昔からこうだったわけではなく、スポーツがビジネスとして急成長してきたことが背景にあります。PGAツアーは、コミッショナーがビジネスモデルを考えて確立させました。タイガー・ウッズの登場によりPGAツアーの放映権料が高騰し、その放映権収入がPGAの莫大な資金源になっているんです。

現在、およそ220カ国以上でツアーが放映されているので、世界中に宣伝できるとあってスポンサー企業にとっても魅力的です。スポンサーが増えれば賞金も上がり、必然的にいい選手が集まってくる。



2016年「セガサミーカップ」にて

賢いはたらき方のススメ🕒

日本では、ツアー主催者の立場が逆なんです。主催者側がお願いしてテレビ局に放映してもらうような状況です。長年この仕組みでやっているの、今から変えることはなかなか難しいでしょうね。

日本にはアジアから参加している選手もいて、日本国内のトーナメント数はアジア圏で最多でしたから、日本からアジアにゴルフ番組を配信するなどのビジネスチャンスがあったかもしれない。そういうビジネスを作ることのできる人がいなかったのは残念ですね。

ー 世界を舞台にチャンスをつかもうという発想は、日本人からなかなか出てこないかもしれませんね。



海外に挑んだ人たち、そこで成功した人たちを特別と見る傾向がありますよね。そして自分ができない理由を探して「しょうがない」としてしまふ。それではもったいないですよ。

アメリカは、実力や能力を身につければ成功して稼げるという風潮ですから、プロの厳しい世界で業績を上げたら、それ相応の報酬を受け取って当然と考えます。それはスポーツでも、芸能界でも、ビジネスの世界でも同じ。ただの夢物語ではなく、がんばれば自分の手でつかみ取れる可能性があるんです。

こういったアメリカの事情を後輩たちに話すと、やはり海外に行くことを考えるようになります。世界で戦える日本人はたくさんいると思うんです。そういう人たちのためにも、こういう情報をできるだけ広く伝えたいと思っているのですが、自慢と受け取られることもあって、なかなか難しいですね。社会のあり方が変われば、日本人の発想も変わるのではないのでしょうか。

グローバル化とは、夢を抱けるようになること

ー 近年は企業もグローバル化が求められていますが、日本と世界の壁はまだ厚いということでしょうか。

英語ができるとか、グローバル・コンプライアンスがどうかという前に、日本社会の考え方を変えないと、本当の意味でグローバル化はできない気がします。アメリカで成功した話をするとうざりと受け取られてしまうのも、日本ではほとんどの人が実現できない非現実的な話に聞こえるからだと思うんです。ですが、子どもの頃から受験戦争を勝ち抜いて、会社に入ったら日々の仕事を地道にがんばっているのに、大きな夢が描けないというのは、残念です。

グローバル化というなら、まずビジネスパーソンにも夢を抱けるように、野心を持って仕事に取り組めるような仕組みづくりから始めたほうがいい。業績を上げたらきちんと評価されて、努力した分だけの報酬や待遇を得ることができればモチベーションも上がると思うんです。そのためには、経営のトップにもそれだけのスケール感が求められます。

私から見て、アメリカと日本で企業力にそれほど差があるとは思えません。日本にも立派な業績を上げている企業がたくさんありますから、社員に夢を与えることもできるはずなんです。前例が1つできれば、目標が身近になって仕事にも身が入る。日本人は皆同じであることを好みますが、平均を目指しては、グローバル化はできないのですよ。一人ひとりがもっと高い目標や大きな夢を目指せるようになるといいですね。そうやって改革していけば、おのずと日本人のマインドも変わっていくのではないのでしょうか。

ゴルフ界を盛り上げるため、自分にできることをコツコツと続けたい

ー 2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、ゴルフ日本代表のヘッドコーチを務めました。今や日本の選手を率いる立場になりましたが、日本のゴルフ界をどのようにしていきたいとお考えですか？

今回のオリンピックでゴルフは個人競技でしたから、ヘッドコーチといってもアドバイスすることなどできません。それぞれの選手には個人コーチがいますからね。だから、私の役目は、会場で選手を引率して、「ナイスバーディ！」と声援を送ったり、いいショットだったら拍手をしたり。場を盛り上げるのに徹することでした(笑)。

— そうだったんですね！ では、ヘッドコーチに抜擢されたのはその明るいお人柄のせいでしょうか？

海外経験があったことと、ベテラン選手と若手選手の中継役として適任だったのでしょう。ゴルファーは気難しいところがあって、選手同士で馬が合う合わないが意外とはっきりしているんです。でも私はそこまで苦手な人がいないし、誰とでもストレスなく接することができるので、ナーバスになっている選手たちを中和できるのは丸山だろうと見込まれたのだと思います。



— そういうお人柄が、人気の秘密ですね。

どうでしょう（笑）。まあ、私は年下の選手が生意気なことを言ったり失礼な態度を取ったりしても、それほど腹が立たないということとはあります。無知なだけということもあるじゃないですか。「それはよくない」と注意すれば、だいたいの子は直ります。「まるちゃん」というあだ名も親しみやすくいいのかもしれないですね。

— 国内では若者のゴルフ離れと言われていますが、いかがでしょうか？

そういう傾向はあるかもしれませんが、それでもゴルフをやる子は必ずいますから、そういう若者にゴルフの楽しさや、やりがいのある世界だということを伝えていくことが大事だと思っています。松山英樹選手のようなスーパースターが現れたことで、ゴルフがイメージアップしたのではないのでしょうか。

我々にできるのは、今ゴルフをしている人たちを大事にして、その中からできるだけ多くのスーパースターをつくりあげていくことです。今までの歴史から見ても、そう簡単にスーパースターは出てきませんから、コツコツと啓発を続けてゴルフのおもしろさを伝えていくつもりです。

それに、ゴルフは個人スポーツですから、一緒にラウンドを回る人と、真剣勝負の絆が生まれるんです。もちろん団体のスポーツでもそういう場面はあるかもしれませんが、実際、企業のトップにゴルフをするという方は少なくありませんね。であれば、ゴルフによって場を共にする機会もできるでしょう。そればかりを意識しては「真剣勝負」はできませんが、結果として、僕はゴルフによって多くの人脈を得て、今があると思っています。今は、私が始めた頃に比べて、かかる費用は数分の一です。ぐっと親しみやすく、皆さんが楽しめるスポーツだと思います。

人生の節目を支えたのは、人と人の結びつき

— ゴルフで成功されたあと、いくつかビジネスを始めていらっしゃいますね。

特に展望があったわけではないんです。地元で気軽に食べられるイタリアンがあるといいなと思ってレストランを開いたり、ロサンゼルスで人気のカフェを日本に紹介したいと思ったのがきっかけでカフェをオープンしたり…。

プロスポーツ選手は人生の節目が2回あると思うんです。現役で好調なまま10年、15年と続けられたとしても、やはりどこかでセカンドキャリアについて考えなければならぬ。海外の有名選手には現役引退後にゴルフ場経営やゴルフ場設計に転身する人が多いのですが、私の場合はそれが、ゴルフ番組の解説やジュニアの育成、そして飲食店のオーナーだったというわけです。自分自身にできることは何かと考えた結果、こうなりました。

子どもの頃から、現役でがんばれるのはこのぐらいまでだろうという目安は見ていたので、節目を迎えた時は特に慌てたりはしませんでした。けがが長引いてトーナメントに出られなくなったのは想定外でしたが、そんなときに「ちょっと手伝ってよ」と声をかけてもらい解説の仕事を始めました。

そんなつもりでおつきあいをしてきたわけではありませんが、これまでいろいろな人と幅広くつきあってきたおかげで、相談できる友人もいたし、進む方向を見極める目を養えたのだと思います。出会った人とのつながりを大切にして、マメにつきあってきたことが実を結びました。

賢いはたらき方のススメ🕒

— 助けてくれる人がいるということも、ご自身の力だと思います。

とんでもありません。私は周りの人たちに助けられている部分がすごく大きい。応援してくれる人、身近にいる人を一生大事にしていこうと思っているし、人づきあいが大好きだから、相当アクティブですよ。次の日の朝5時半に起きなきゃいけないけど「今日の夜どう？」と誘われれば行きます。断ったことがないし、人づきあいを面倒だと思ったことがないんです。

— そのためにも体調管理にはずいぶん気をつけていらっしゃるのですね。

一晩に食事の誘いが2件ということもありますが、暴飲暴食はしないようにしているので大丈夫です。それに3、4時間眠れば足りるので、移動時間を使って上手に睡眠をとっています。人生一度きりですからね。気合いです、気合い！ そうやっておつきあいしてきた方々が、ここぞというときに助けて下さるので、非常に感謝しています。



取材後記

アスリートが、実際のプレーを頭の中で描きながら、「勝つ」までの様子を具体的に思い描く「イメージトレーニング」。これはアスリートに限らず、ビジネスパーソンにも同様に必要だろう。ではグローバル化といった時にどんなイメージができるだろうか。「海外企業の社員と英語で話している」のは、決してグローバル化のイメージではないはずだ。一人ひとりのグローバル化には、小学生の「まるちゃん」がPGAツアーでプレーする自分を夢見たような具体的な絵を描くことが必要なのだ。

プロフィール

丸山茂樹(まるやま・しげき)

1969年千葉県生まれ。日本大学で活躍、アマ37冠で92年にプロ入り。「まるちゃん」の愛称で親しまれ、日本ツアー通算10勝をあげている。2000年からPGAツアーに本格参戦し、通算3勝をあげる。また2002年には伊沢利光プロとのコンビで、EMCゴルフワールドカップを制している。現在は、ゴルフ中継の解説者をはじめ、様々なメディアにて活躍する傍ら、一般財団法人丸山茂樹ジュニアファンデーションの代表理事として、ジュニアゴルファーの育成にも力を入れている。2016年リオデジャネイロ五輪では、ゴルフ日本代表ヘッドコーチを務めた。

